



Title	室町後期の『源氏物語』享受に関する研究—宗祇の古 注釈書を中心に—
Author(s)	川渕, 紗佳
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105369
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認した ため、全文に代えてその内容の要約を公開していま す。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文につい てをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名（川 渕 紗 佳）	
論文題名	室町後期の『源氏物語』享受に関する研究 —宗祇の古注釈書を中心に—
論文内容の要旨 本論文では、室町後期（一四七〇～一五七〇年代）における『源氏物語』享受について考察する。特に、連歌師である宗祇（応永二十八（一四二一）年～文亀二（一五〇二）年）の著作に着目し、室町後期に活躍した連歌師がどのように『源氏物語』を読解していたか、そしてそれが連歌師としての活動とどのような関係性を持つかについて考察を加える。 室町後期の『源氏物語』享受において、重要な存在が連歌師である。連歌師は、応仁の乱（応仁元（一四六七）年～文明九（一四七七）年）以降、都だけではなく全国各地で、連歌会や王朝物語・和歌などの古典文学作品の講釈活動を行っていた。したがって、連歌師の注釈書を対象として、注記内容から『源氏物語』をどのように捉え、解釈したかを明らかにすることで、室町後期の『源氏物語』享受の在り方を把握できる。そのために、室町後期の源氏学を把握するために連歌師が著した注釈書の現存諸本の整理や、注記内容の詳細な検討を加える必要がある。 連歌師の中でも宗祇を中心に据える理由は、宗祇が室町後期を代表する連歌師であるためである。連歌の隆盛に大きく貢献しただけでなく、一条兼良からは『源氏物語』を学び、飛鳥井正親からは和歌を学ぶなど、公家たちから古典学を学んだ。一方で、連歌師である宗硯・心敬・専順、武家歌人の東常縁にも師事し、和歌や連歌を学んでいた。ここから、宗祇は公家・連歌師・武家歌人など様々な身分の人々と交流し、学問的な知見を得ていたといえる。宗祇の『源氏物語』読解を中心に据えることで、室町中期の社会における文化的交流の中での『源氏物語』享受の位置づけを知ることができると考えられる。従来、『源氏物語』の享受史研究においては、公家で作成した注釈書を中心に検討されてきた。しかし、連歌師の注釈書にも目を向けて相対的に捉えることで、当時の社会における『源氏物語』享受の実態に即した考察を行えると考ええる。 連歌師たちの『源氏物語』の享受を考える上で、連歌関連作品にどのように摂取されたかについても考える必要がある。連歌師の主たる目的は連歌を詠み連歌会を催すことであり、そのために『源氏物語』の知識を得て、それを発信する必要性があった。宗祇をはじめとする連歌師たちが、『源氏物語』をどのように解釈していたかだけでなく、それをどのように連歌関連作品に摂取していたかについても、未だ検討は不十分である。各句の典拠として『源氏物語』の表現を指摘する例は見えるが、連歌と『源氏物語』注釈書の関係性を享受という観点から検討を加えたものはない。注釈書の注記内容から当時の『源氏物語』読解の実態を把握し、それが同時代の連歌関連作品へどのような関係性を持つかを確認する。 先行研究では、宗祇の存在が『源氏物語』研究史を考える上で重要であると認め、学説の継承や摂取、一条兼良をはじめとする先行注釈との差異を提示した。また、自身の弟子である肖柏や、三条西実隆の『源氏物語』研究に及ぼした影響についても指摘された。これらを通して、宗祇の『源氏物語』研究の位置づけや独自性が明らかとなったといえる。しかし、宗祇が『源氏物語』をどのように解釈し、何を目的として、どのような注釈書を著したかについての検討については、未だ不十分な点もある。宗祇が発展させた『源氏物語』読解について、その背景にはどのような需要があったのかは検討する必要があるだろう。 宗祇は『雨夜談抄』や『種玉編次抄』のように一部の巻を対象とした注釈書や、『源氏物語不審抄出』のような物語内の「不審」のみを取り上げた注釈書を作成している。他の『源氏物語』注釈書と比較すると短い作品であるという特異性があり、そのために宗祇の『源氏物語』研究の全貌の把握が難しいと考えられてきた。そのため、宗祇の存在が『源氏物語』享受史において重要であると認められつつも、研究が進まなかったといえるだろう。 以上のような問題意識のもと、以下のとおり各論を展開した。 第一章では、『源氏物語』藤裏葉巻で行われた藤花宴の開催日をめぐる記述の不審と、それを取り上げた注釈の変遷を論じた。藤花宴の開催日については、物語本文の表現から四月朔日とする説と、四月七日とする説の二つがある。河内方源氏学では、朔日とする説を重要視し物語内の記述によって生じている矛盾を乗り越えようとしていた。し	

かし、この藤花宴の開催日は、現在の通説では七日と解釈する。この七日開催説を重視したのは、一条兼良や連歌師たちであり、それが現在まで継承されるに至った。このように、現在では当然のように考えられている解釈の源流をたどると、連歌師の『源氏物語』研究の成果が反映されているといった事例を示した。連歌師の『源氏物語』研究が、現代に至る『源氏物語』読解に与えた影響が大きいことを示し、宗祇を中心とした連歌師の源氏学の検討することの必要性を提示した。

第二章では、『雨夜談抄』の一つ目の注記と二つ目の注記を中心に検討した。『雨夜談抄』は帯木巻のみという、五十四帖のうちわずか一帖のみを対象とした注釈書で、宗祇は初学者向けに作成した。『雨夜談抄』の一つ目の注記を確認した結果、本書は帯木巻の説明にとどまらず、『源氏物語』の全体像を踏まえているとわかった。そして、帯木が『源氏物語』の全体の性質を示すことのできる重要な名前であるとした。これは、宗祇が帯木巻のみの注釈書を著す際に、帯木巻そのものの価値を高めようとした結果で、単に五十四帖の中の一つの帖ではなく、『源氏物語』全体の性質を把握するために帯木巻を解釈することが必要であると考えていたといえる。二つ目の注記からは、『源氏物語』を自分が創作したように見せず、昔の出来事を聞き及んで著したように書いたという執筆姿勢を示していると提示した。以上を踏まえて、『雨夜談抄』を、宗祇の『源氏物語』読解態度を端的に窺える注釈書として位置づけた。

第三章では、『雨夜談抄』の人物比定について再検討を行った。『雨夜談抄』に特徴的な注記として、抽象的な女性論に、物語に登場する女性を当てはめる注記があげられる。この『雨夜談抄』の人物比定が、複数の判断基準を持つものであったと示した。一つ目の判断基準として、左馬頭を雨夜の品定めを主導する人物として、重要視し、左馬頭が思い浮かべた人物のみが比定されていた。理念的な女性論を主導するストーリーテラーとして、左馬頭の思考を重視した結果である。二つ目の判断基準として、宗祇が『源氏物語』全体の内容を踏まえた上で、帯木巻の雨夜の品定めにも具体的な人物を比定した注記も確認できた。

第四章では、『雨夜談抄』と同じく宗祇が初学者向けに作成した『種玉編次抄』を取り上げた。『種玉編次抄』は『源氏物語』第三部の勾兵部卿巻から宿木巻までを対象に物語の時間軸の矛盾に着目した注釈書である。宗祇は、物語内の矛盾に対して以前の官職を意図的に使用していると処理した。これらの解釈では、「言ふ」「呼ぶ」といった動詞を使用して作者を主体として捉え、物語解釈に寄与する存在として認識していたとわかった。以前の官位を意図的に使用しているとして、呼称不審を解決しようとする姿勢は一条兼良や三条西実隆の著作からも見え、提示した解釈は異なるが物語内の表現に着目し作者の存在を踏まえて解釈を試みた点が共通していた。

第五章では、『源氏物語不審抄出』を取り上げた。『不審抄出』は宗祇が『源氏物語』内の不審のみを取り上げ、それに対する見解を示した注釈書である。注記内容に「講釈の時、不審の輩あれば」など講釈の場を前提とした文言が見える点から、本書は講釈を行う人に向けた手引き書としての性格を有すると明らかにした。宗祇が『不審抄出』以前に作成した『雨夜談抄』『種玉編次抄』では、物語内の不審をどのように解釈すれば良いかを、初学者にも理解できるように著していた。一方、『不審抄出』では、複数の説を示し、自身の注釈は示さず他の注釈書を見ることを促すなど、施注態度が異なる。特に講釈の場を意識した表現から、宗祇が講釈に参加する人物に向けて、自身の体験も踏まえた注記を施したと考察した。したがって『不審抄出』は講釈に参加する宗祇の源氏学を継承する人物の使用を想定した注釈書だったといえる。

第六章では、まず『連珠合璧集』において、どのような詞が源氏寄合として掲げられているかを確認した。『連珠合璧集』の源氏寄合は計291例確認でき、そのうちの238例は本文表現もしくは巻名と一致する詞であった。一方で、源氏寄合であることは明らかなが本文には見られない表現を寄合として掲げている例も見えるため、必ずしも本文に即した表現を寄合としていたわけでもなく、登場人物の性格や出自を踏まえた源氏寄合が指摘される例もあった。そして、源氏寄合として掲げられた詞に、『源氏物語』の古注釈書でどのような注記が施されているかを確認し、源氏寄合と古注釈書の関係性を明らかにすることを試みた。その結果、連歌寄合と古注釈書の注記内容に直接的なつながりを見出すことはできなかった。この現象を寄合書の編纂意識と、注釈書の施注意識が異なるものであるためと考えた。ただ、わずかな例ではあるものの、源氏寄合として掲げられている言葉を肯定的に評価する注記も確認できた。

以上、室町後期における『源氏物語』享受について宗祇の著作を中心に据えて検討を行った。宗祇は、初学者向けの注釈書では、一部の巻を対象とした注釈書であっても、『源氏物語』の全体像について言及していた。どのような執筆姿勢を持つかなど物語を読解する上で必要と考えられる情報を提示している。一方で、『不審抄出』のように講釈に参加する宗祇の源氏学を継承する人物の使用を想定した注釈書も作成していた。連歌関連作品との関係性については、寄合書である『連珠合璧集』を取り上げて行った。その結果、直接的な関連性はいまだせなかったが、『源氏物語』の優れた表現を連歌に取り込もうとする姿勢は確認できた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (川 渕 紗 佳)	
論文審査担当者	(職) 氏 名
	主 査 大阪大学 教授 滝川 幸司
	副 査 大阪大学 教授 岸本 恵実
	副 査 大阪大学准教授 浅井 美峰
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 室町後期の『源氏物語』享受に関する研究—宗祇の古注釈書を中心に—

学位申請者 川渕 紗佳

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 滝川 幸司

副査 大阪大学教授 岸本 恵実

副査 大阪大学准教授 浅井 美峰

【論文内容の要旨】

本論文では、室町後期における源氏物語享受について考察する。特に、連歌師の宗祇に着目し、室町後期に活躍した連歌師がどのように源氏物語を読解していたか、そしてそれが連歌師としての活動とどのような関係を持つかについて考察を加える。

序章では研究史を概観し、本論の目的を述べる。第一章では、源氏物語藤裏葉巻で行われた藤花宴の開催日をめぐる記述の不審と、それを取り上げた注釈の変遷を論じ、現在の通説で七日と解釈していることが、一条兼良や連歌師たちの見解に遡ることを指摘し、連歌師の源氏物語研究が、現代に至る源氏物語読解に与えた影響が大きいことを示す。第二章では、雨夜談抄の一つ目と二つ目の注記を中心に検討し、雨夜談抄を、宗祇の源氏物語読解態度を端的に窺える注釈書として位置づけている。第三章では、雨夜談抄の人物比定について再検討を行い、左馬頭のストーリーテラーとしての重要性、源氏物語全体の内容を踏まえた上での注釈としての性質を論じる。第四章では、雨夜談抄と同じく宗祇が初学者向けに作成した種玉編次抄を取り上げ、「言ふ」「呼ぶ」といった動詞を使用して、作者を主体的に捉え、物語解釈に寄与する存在として認識していたと論じる。第五章では、源氏物語不審抄出を取り上げ、本書が講釈を行う人に向けた手引き書としての性格を有すると論じる。第六章では、連歌寄合書である連珠合璧集と源氏物語古注釈の関係について論じる。取り上げられる寄合語が、必ずしも本文に即した表現を寄合としていたわけではないことを指摘し、さらに、源氏寄合として掲げられた詞が、源氏物語古注釈書でどのように取り上げられているかを概観し、連歌寄合と古注釈書の注記内容に直接的なつながりを見出すことはできないと指摘する。終章で各章の内容を改めて要約し今後の課題を述べる。

以上、室町後期における源氏物語享受について宗祇の著作を中心に据えて検討を行ったのが本博士論文である。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、室町後期における源氏物語享受について、特に、連歌師宗祇の著作に着目して考察を加えている。源氏物語古注釈の研究は、伝本研究、書承関係を中心にしつつ検討されている。河海抄や花鳥余情などの先行注釈の学説の継承が中心に論じられてきたといえ、それによって宗祇の学説もある程度までは明らかにされてきた。しかし、宗祇の著作が、源氏物語の一部分にしか注を施していないこともあって本格的には論じられてはこなか

った。そうした情況下、本論文では、宗祇が注記する内容の分析自体に重きを置き、宗祇が源氏物語をどのように解釈し、何を目的として、どのような注釈書を著したのか、また、宗祇が発展させた源氏物語読解について、その背景にどのような需要があったのかを検討している。

序章では研究状況を簡潔に示し、本論文の目的を述べ、第一章では藤裏葉巻に記される藤花宴の開催日をめぐる注釈の変遷について概観し、連歌師の注釈が現在に通じる説を提示していることを指摘して、連歌師、特に宗祇の源氏注釈の重要性を述べる。ここまでが序章的な内容である。第二章から第五章では、宗祇の個別の源氏注釈をそれぞれ検証する。第二章、第三章で雨夜談抄を取り上げ、第四章では、種玉編次抄、第五章では源氏物語不審抄出が取り上げられる。第六章では連歌の寄合書に見える源氏寄合と源氏物語注釈書の関係が論じられる。終章では本論文の内容を改めて要約し、今後の課題を述べる。

序章終章以外の六章は、既発表論文 5 本に新稿 1 本で構成される。既発表論文のうち 3 本は学外の雑誌や書籍に掲載されたものである。

本論文では宗祇による源氏物語注釈のすべてを取り上げ、その注記内容を具体的に分析することで、宗祇の源氏学の特徴を明らかにしようとしている。第二章、第三章で取り上げられる雨夜談抄は、初学者向けに宗祇が帚木巻の雨夜の品定めに注釈したものだが、この注釈では、紫式部の創作姿勢を論じること、帚木巻以外に登場する人物についても取り上げられていることなどから、源氏物語全体についての宗祇の見解を示していると論じている。第四章では、雨夜談抄と同じく宗祇が初学者向けに作成した種玉編次抄を取り上げる。種玉編次抄は源氏物語第三部の匂兵部卿巻から宿木巻までを対象に、物語の時間軸の矛盾に着目した注釈書である。現在でもこれらは物語上の矛盾とされることが多いが、宗祇は、作者を提示し、この矛盾は作者が意図的に行ったものだと説明する。これは作者が誤るはずはないという考えを前提にしていると思われるのだが、宗祇は源氏物語を読解するに際し、作者を表に立てているといえよう。矛盾を解消しようとする注釈は他にも見えるが、宗祇のように作者の存在に重きを置くものは他にない。第五章では、源氏物語不審抄出を取り上げ、注釈内容を分析して、講釈の場を意識した表現の存在を見出し、宗祇が講釈に参加する人物に向けて、自身の体験も踏まえて注記を施したと考察している。

このように具体的に注釈内容を分析することで、宗祇の源氏物語読解の方法や注釈書の性格を明らかにしたところが本論でもっとも評価すべき点であろう。

また、第六章は源氏寄合と古注釈書の関係性を検証しており、その結果、連歌寄合と古注釈書の注記内容に直接的なつながりを見出すことはできなかったものの、連歌師の源氏物語注釈という存在を考える上で、連歌自体との関係を探ることは重要である。連歌師宗祇の源氏学を検証するにつき、こうした分析は当然必要であり、今後さらに進めていくべき課題である。

以上のようにこれまでの研究では希であった、総体的な注記内容の分析を行ったところが本論でもっとも評価すべき点であり、個別の問題には集中的に精度の高い考察・検証を行っているところはまさに評価されるところだが、ただ、その成果の価値を主張することに極めて抑制的で、却って本論の価値を減ずるところがあるのは惜しまれる。また、内容分析を重視したあまりに個別の検討で終わってしまった面があり、室町後期という時代での宗祇注釈の位置づけが不明確であったり、宗祇の源氏学を総体的に説明しているところが少なくなってしまうりする点も惜しまれる。

しかし、これまでの研究に新たな側面を追加し、研究を進展させたことは確かであり、今後さらなる展開が期待される。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。